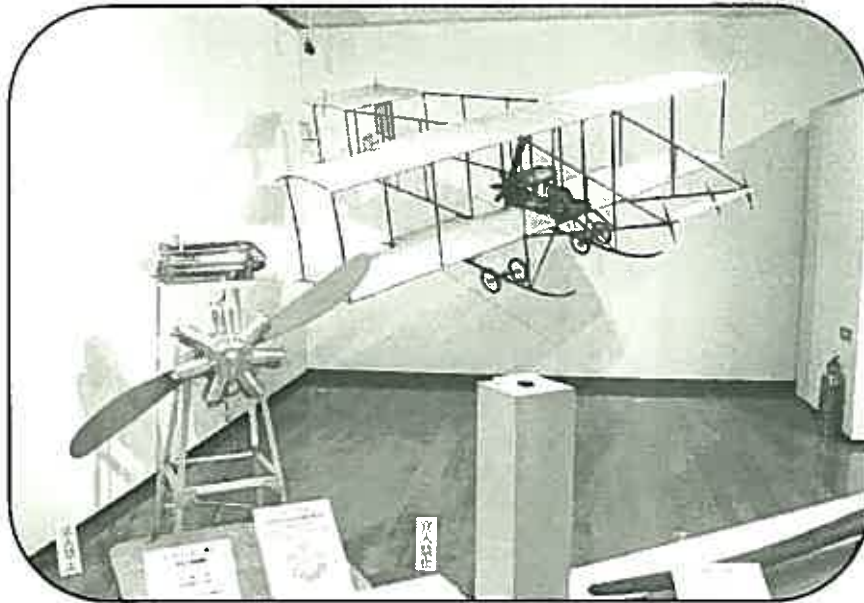


郷土博物館・文学館だより



展示室の様子

アンリ・ファルマン機の 1/4 の復元模型や 1/2 のエンジン模型のほか、絵葉書、少年雑誌などを展示しています。模型は 12 月 22 日（火）まで当館で展示し、23 日以降は渋谷区文化総合センター大和田 3 階にある「こども科学センター・ハチラボ」で 1 月 10 日（月・祝）まで展示します。

企画展

「渋谷で飛行機が飛んだ」開催中

今からちょうど 100 年前の明治 43 年（1910）12 月 19 日、代々木練兵場（現在の代々木公園）で、日本で初めて動力付きの飛行機が飛行実験に成功しました。

飛行機を操縦したパイロットは、徳川好敏大尉と日野熊蔵大尉の二人です。徳川大尉は、フランスのアンリ・ファルマン機（複葉機）、日野大尉はドイツのハンス・グラデー機（単葉機）を操縦し、フライトを成功させました。

今回の展示では、日本で飛行機を飛ばすために、二人の大尉がヨーロッパへ飛行機の調査に行ったことや、自らパイロットの訓練も行ったことなど、初飛行成功までのエピソードを中心に紹介しています。

また初飛行が成功すると、当時の日本の少年雑誌などには「飛行機」に関する記事がたくさ

ん掲載されるようになりました。またたく間に飛行機が人びとの話題にのぼる存在になったことについても、当時の雑誌や絵葉書などを展示しながら紹介しています。



展示解説風景

11 月 13 日（土）に行われた展示解説の様子。
12 月 11 日（土）14 時から予定されています。

恵比寿の街とビール工場

恵比寿ガーデンプレイス周辺は、今では渋谷の代表的な観光スポットになっていますが、かつてここにビール工場があったことをご記憶の方も多いのではないかと思います。

明治時代なかば、日本では相次いでビール会社が設立されましたが、その中で明治 20 年（1887）に現在のサッポロホールディングスの前身である日本麦酒醸造が誕生しました。日本麦酒醸造は、荏原郡三田村の北端（現在のガーデンプレイスの南側付近）の土地を取得し、翌 21 年からビール工場の建設に着手しました。工場内には、ドイツからビール醸造用の機械設備を取り寄せて設置し、また同国の醸造技師を雇用して、製造の指導にあたらせることになりました。

こうして 22 年、当時まだ畑が広がる台地の真ん中に、レンガ造り 3 階建てのビール工場が誕生しました。工場では近くを流れる三田用水の水を使用してビールの製造が開始され、それを「恵比寿ビール」という名前で売り出しました。この商標名が恵比寿の地名の由来となります。ビールは大変評判となって生産量は増加し、33 年に、工場敷地は北側の豊多摩郡渋谷村まで大きく拡張されました。

工場では東京市内へのビールの出荷のため、現在の明治通りまで専用道路を造り、渋谷川を越えるところでは橋を架けました。これが現在の「恵比寿橋」です。さらに 34 年には、工場の横を通る日本鉄道（現在の山手線）で、ビール積み卸し専用の「恵比寿駅」が開業しました。恵比寿駅で一般の乗客の乗降ができるようにな

るのは 39 年になってからです。昭和 3 年（1928）になると、「恵比寿通一〜二丁目」という町名（当時は小字）も登場し、この地域は「恵比寿」という名前が定着しました。また、周辺はビール関連の産業も盛んになってゆきました。

ビール製造とともに発展したこの地域において、工場は街の象徴でもありましたが、昭和 60 年になって工場の船橋市への移転が発表されます。そして 63 年に最後の製造作業が終わり、長い歴史をもった工場は閉鎖されました。

その後、跡地では再開発事業が進められ、平成 6 年（1994）に、敷地面積約 8 万 3,000 m² の「恵比寿ガーデンプレイス」が完成しました。それによって街の発展はあらたなスタートをきり、現在に至っています。



昭和 53 年 アメリカ橋からみたビール工場

三島由紀夫と渋谷

今年、三島由紀夫の没後 40 年にあたります。昭和 45 年（1970）年 11 月 25 日、三島は、楯の会の学生・森田必勝ほか 3 名とともに、自衛隊市ヶ谷駐屯地で自衛隊の決起をうながすも果たせず、東部方面総監室で割腹自決をとげました。

三島は、大正 14 年（1925）、東京市四谷区永住町に生まれました。父は農林省官吏、母は前田藩儒者で東京開成中学校長を務めた橋健三の次女、祖父は樺太庁長官を務め、祖母は大審院判事永井岩之丞の長女にあたります。祖父母と両親とともに過ごした幼年期の家庭の雰囲気は『仮面の告白』（昭和 24 年）からその一端が感じられます。

三島と渋谷との関わりは、昭和 12 年 4 月、学習院中等科への進学とともに、大山町 15（現在の松濤 2 丁目）の父母のもとから通学した時にはじまります。昭和 19 年、東大法学部入学後、学徒動員で中島飛行機小泉工場に勤務した時期を除いては、昭和 25 年 8 月、目黒に移転するまでの時代をこの渋谷の地で暮らしました。

この間、大学在学中の昭和 19 年に処女小説集『花ざかりの森』を刊行し、昭和 22 年には大学卒業と同時に大蔵省に就職します。しかし翌年には退職、最初の連作長編『盗賊』を発表、続く昭和 24 年には『仮面の告白』で新進作家として、文壇での地位を確立します。

三島は、渋谷をえがいた作品も残しています。

『豊饒の海』の第一部『春の雪』は昭和 40 年 9 月から『新潮』に連載されましたが、作品の舞台は東郷神社（現在の神宮前 1 丁目）付近です。

このほか昭和 25 年頃の夜の渋谷を描写した『渋谷—東京の顔』には、「銀座でも浅草でも似つかはしくなく、渋谷でなければならぬ学生気分の寛容な容認がこの街にはあるやうに感じられた」と渋谷の印象を述べています。

また、『渋谷—暮の東京』では、昭和 28 年頃の歳末の渋谷駅界隈について「渋谷といふ町全体が、駅にまたがって、地面に足をつけず、空中にうかんでゐるのだ。地下鉄もここでは人々の頭上から発車する。渋谷は、年中あはたはたしく、いはば年中、歳末みたいなものだ。いつまでたつても新開地で、ちつとも落ち着きがなく、しゃれた喫茶店一つ探すのにだつて苦労する」と語っています。



松濤の旧三島邸

収蔵資料紹介

伝・服部南郭所用具足

ふだいためいのべかわつつみよこつぎどうくそく
(札板縫延革包横矧胸具足)



当資料は、江戸時代の学者・

を守りました。

服部南郭が使用したとされる具足で、兜は鉄錆地の六十二間筋兜です。筋兜とは、二等辺三角形の鉄の板をつなぎ合わせ、半球形の鉢形にし、接合部分の端をわずかに立てて筋状にしたことから、そう呼ばれています。接合枚数が多いほど手間がかかり高額となりますが、強度が増して見た目にも美しいことから、六十二間筋兜は大名をはじめ富裕な士族が注文しました。兜の襟首を守る「しころ」部分は、半田形に湾曲した鉄板を「威系(おどしいこ)」と呼ばれる組紐によって繋げたものです。これによって戦闘時にも動きやすくなっています。この資料の「しころ」は5段の鉄板全てが鹿革に包まれ、漆が塗られています。

顔面には「頬当(ほおあて)」と呼ばれる面具を付け、顔と喉

胸は、鉄製の板をそれぞれ鹿革で包んだあと革の紐で繋ぎあわせ漆を塗っています。胸の部分の一段目と脇部分は、着用者の動きに対応できるように、脅糸で板が繋がれています。胸から下がる下散(げさん)は、脚部を守る役目をしています。脚部を散の隙間を補う防具として「佩楯(はいだて)」と呼ばれるものも、太ももに付けました。さらに手には「籠手(こて)」は「臑当(すねあて)」を付けます。これらは皆、長方形の板状の金具と鎖を繋ぎ合わせ、それを布に縫い止めたものです。当資料では、布に印金という技法を使って、トンボの模様が押されています。トンボは飛んでいる際に決して後退しないことから、「勝ち虫」と呼ばれ、武士が好んで使用した図柄でした。

【今後の展示予定】

企画展「渋谷で飛行機が飛んだ」

開催中 平成23年1月10日(月・祝)まで

*今から100年前、現在の代々木公園で飛行機が飛びました。その初飛行を記念し、飛行機の黎明期について展示しています。

企画展「島尾敏雄と奥野健男」

平成23年1月22日(土)

～平成23年3月21日(月)まで

*作家・島尾敏雄のファンであり、またその作品を高く評価していた評論家の奥野健男。島尾の代表作を奥野の視点で読み解くとともに、二人の交流を紹介します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1名以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.15

平成22年12月1日発行